

異世界コンビニ

Convenience Store Fanfare Mart Purunascia

榎木ユウ

Yu Enoki

2



ポウちゃん

異世界コンビニの防犯カメラ。
奏楽に懐いており、
様々な進化を遂げて
彼女を守ろうとする。

ミサオ

ケンタの母親。
大のBL好きな、
41歳の美魔女。

スズカ

ブルナスシアに住む、
元巫女の日本人。
凛とした美しさがある。

ジグ

店長の幼馴染で、
コンビニを守る神殿騎士。
「雷鳴のジグ」という二つ名を持ち、
その強さは伝説級。

ハクサ

キザク国の第五王子。
いつも奏楽に
「残念王子」と言われている。

小林アレイ

奏楽が勤めるコンビニの
店長、三十路。
日本人と異世界人とのハーフで、
神殿の神官の職も持つ。
ようやく奏楽に想いを伝えたものの、
更なる困難に見舞われることに。

ラフレ

ナナナスト国の第七女王。
今は神殿に
神官として勤めている。

ケンタ

ブルナスシアに召喚された勇者。
中学三年生ながら、魔物の討伐と、
コンビニバイトに勤んでいる。

藤森奏楽

異世界ブルナスシアの
コンビニ店員、23歳。
世界樹を癒す巫女の仕事も担う。
マッチョな男性が苦手だが、
アレイは別。

プロローグ 前巻のあらすじを説明しながら、お仕事してみるよ

「いらつしやいませー！」

元気な声と共に、ピヨコンと顔を上げて、こんにちは。

お久しぶりの皆さんも、初めましての皆さんも、ようこそ！ こちらは異世界コンビニ・ファン
ファレマート、プルナスシア中央神殿駅前店です。

何言ってるんだ、コイツ？ と帰るのはまだ早い。外はまだまだ寒いですから、ホカホカの美味
しいおでんであったまりませんか。ファンファレマートのおでんは地産地消。地元農家さんの美味
しい大根です。あ、地元といっても、それは「日本」のことであって、ここ異世界「プルナスシ
ア」とは違う世界の話ですけどね。

ここは、日本のものを丸ごと持ってきちゃった日本製のコンビニです。

プルナスシアは、大陸全土を覆う巨大な世界樹を中心とした世界。世界樹は元々日本の桜がト
リップしたものだということ、プルナスシアの人であれば誰もが知っています。その世界樹のた
めにできたのが、このコンビニです。

そして、胸に輝くプレートに「チーフ」という冠を付けましたが、私、藤森奏楽。二十三歳。

日本人。そうです。唯一、日本とプルナスシアを繋ぐこのコンビニで働く私こそが、日本を恋しが
る世界樹を鎮める「巫女」であるのです。「巫女」といっても、コンビニで普通に店員をするだけ。
祝詞を唱えることもありません。

ただここに、日本人が在る。

そのことが、世界樹を安寧へと導くのです。

こう説明すると、やだ、格好いい。私、超有能！ 見た目はポプカットの童顔女子だけど、口を
開けばお殿様もビックリな毒舌暴言。「無垢なるマシンガン」とは、私のことです。

「ソラちゃん、無垢なるマシンガンとか変な二つ名、自分でつけなくていいから」

「勝手に人の自己紹介と前巻のあらすじ説明に割り込んでこないでくれます、店長？」

隣で困惑気味に私を見下ろしているガタイのいい男は、店長・小林アレイ、三十歳、独身。

このプルナスシアの神官であり、無垢なる私をここに引きずり込んだ張本人だ。いつの間にか
三十歳。ますますおじさんに磨きがかかっていると思われ——

「いやいやいや、三十代、おじさんじゃないし！ そんなもって前巻のあらすじとか、前巻って
何？ 誰もお客さんのいない店内で何の話をしているの？ ソラちゃん、怖いよ……！」

「いやだ、店長。目の前にお客さんがいるの見えないんですか？」

私がバーコードリーダーを手にレジ前を見れば、店長がギョツと目を見開いて同じ方向を見つ
める。

「誰もいねえよ」

ポツリと突っ込むと、「ソラちゃん！」と店長の返す声。一瞬、信じかけていただろうお前。

「三十路にもなって、幽霊を信じるとか……」

「幽霊を信じるのに三十路も二十歳も関係ないでしょ？ というか、三十歳になったのは確かだけ
ど、ソラちゃん、せめてお祝いの言葉ぐらい言っつてよ！」

「はいはい、おめでどうございます」

「それだけ!? もっと、他にっ……ホラ！ 胸の内からあふれる言葉を——！」

胸を広げて大げさなジェスチャーをする店長から、スッと私は離れる。

「何言わせたいのか分かりたくもないから、無駄な胸筋、押し付けないでください。暑苦しい」

「……ソラちゃん！」

打ちひしがれる店長がレジカウンターに突っ伏すのはいつものことなので、放っておく。

ちゃらっちゃら、ちゃらちゃららん。

景気よく流れるのは、聞き慣れた電子機械音。本当のお客さんが入店してくるのだ。

「さて、前巻のあらすじも終わりましたし、そろそろ本編に入りますか」

「だから、誰に説明……！」

そんなの分かり切っていることだろうが。私はにつこりと微笑んで、今度こそ本物の挨拶をする。
「いらっしやいませー！」

ファンフレマーケット、プルナスシア中央神殿駅前店にようこそ！

うん、この店名、長いな！

1 勇者のおかんが異世界でコンビニ店員

「今日、ドンゴ八号神官が来るから」

店長がボツリとそう言ったのは、十二月に入ったばかりのある日のことだった。

「あ、そうですか」

「まあ、ソラちゃんはあまり関係ないと思うけど。来たら事務室に案内してね」

「了解です」

今日の店長は少し真面目モードだ。それもそのはず。ドンゴ八号神官は、勇者ケンタをプルナスシアに召喚した人だからだ。

ケンタは私と同じ日本人。勇者としてプルナスシアに召喚されてしまった十五歳の少年だ。世界樹から勇者としての力をもらえる代わりに、日本にいた時の記憶を少しずつ吸い取られていくという悲劇の運命を背負っている。勇者でいられる期間は一年間。つまり一年で記憶を失うのだ。

一方、「巫女」の私は、コンビニからプルナスシアに出られないが記憶を失うことはないし、日本に戻る。しかし、プルナスシアに召喚されてしまったケンタは二度と戻れない。

その原因を作ったのが、先ほど店長が名前を口にしたドンゴさんという人だ。そんな人がどうして今日、コンビニに来るのかといえば、理由は一つしかない。

私は、そのきつかけと思われる人に目を向ける。

「ソラさん、この棚ってこれで大丈夫かしら？」

しっとりとした声で、レジ前の棚をクリスマス仕様に変えていた女性がこちらを振り返る。

新しい店員のミサオさんだ。御年^{おんねん}四十一歳。おばちゃん……と言っではいけない雰囲気、ほっそり美人は今日もはんなりした雰囲気^{かも}を醸し出し、微笑^{ほほえ}んでいる。

「バッチリです」

「このケーキ、食べられないのに、クリームがリアルよねえ」

棚の一番上に飾られたプラスチックケース内のケーキを眺めながら、ミサオさんがそう言った。

彼女は何か、ケーキの上で背中合わせに佇^{たまたず}む青いサンタと赤いサンタを見つめている。その様子はやけに熱っぽいし、色っぽい。

四十一歳でその色気ダダ漏れってどうなの？ と思わなくもないが、旦那さんも四十六歳には見えないほど若々しくて、ダンディ。夫婦揃って素敵なご夫婦なのだ。

そんなミサオさん、パッと見はセレブ妻って感じなのに――

「ああ、きつとこのサンタさん同士はケン、カップルで、この後、クリーム^{まみ}塗れの仲直りをするのね」
「……」

私の隣で真面目な顔をした店長が、よせばいいのに、ミサオさんに声を掛ける。

「あのお、ミサオさん。そのサンタ、どちらも男ですけど……」

「あら？ 男同士でも恋愛は自由でしょ？ サンタ同士って何だか萌えませんか？ ああ、でもそれ

より、店長がジグさんと絡んでくれた方が嬉しいんだけど」

うっとりしながらミサオさんの口から紡がれた言葉に、店長がピシりと固まった。

「ミ、ミサオさん……?」

エマーージェンシー! エマーージェンシー! と、店長の頭の中では警告音が鳴り響いていることだろう。だけど、私は傍観を決めこむ。これは、突っ込んだ店長が悪い。その沼は底なしだ。

「そうねえ、シチュはこのコンビニのレジカウンターなんてどうかしら? もちろん、店長はボウちゃんに絡まれて動けないの。そこを背後からジグさんがズブツと——」

「うわああああああ! ケンタ! ケンタっ! どうにかしろっ、お前の母親だろうが!!」

店長が叫びながら、店内掃除をしているケンタに助けを求める。だが、ケンタは自分の母親のことなのに素知らぬ顔だ。

「あ、俺、今掃除中なんで」

そうなんです……!

前回から、ガラリと大きく変わった点——このコンビニ、店員が増えました! 勇者の母、ミサオさん!

中学生の子供がいるとは思えない綺麗系ママさんで、ネット掲示板で奇跡のケンタ母発見からのちに、コンビニ店員になったのだ。東京ビッグサイト前を知る生粋のオタク主腐でもある(誤字ではない)。

ということで、この親から生まれるべくして生まれたサラブレッド・ケンタ。

ケンタが母親と再会した際のミサオさんの発言は名言だ。

『で? 好きな男の子、できた?』

『どうして、その記憶から消えない、俺——!』

ケンタが悶絶して膝から崩れ落ちるほどの、ツワモノかーちゃんだった。

そして、出るわ出るわ、涙なくしては聞けないケンタの黒歴史。よく、この親で真っ当に育ったな、と感心せずにはいられない。

コンビニの事務室の片隅に作られた、ケンタの思い出保管場所。そこには、ミサオさんの手によつて持ち込まれたケンタのアルバムが置かれている。男の娘姿のケンタ写真集に、王子が肩を震わせていたが、ケンタは涙目で何も言えない様子だった。

『世界樹、できればこの記憶から取り上げてください……!』

ケンタは、そう願ったとか願わなかったとか。そういう記憶に限ってなかなか消えないというのだから、いい思い出として大切にしなよ、と私は締めくくっておいた。

話を戻すが、この素敵主腐ミサオさんがこの異世界コンビニの店員となった結果、日本とこちらを行き来できる人が二人となり、世界樹はますます安定している。

こんなことなら初めから二人とか三人にすれば良かったのにと思わなくもない。だが、**桜**を思う人が増えると、日本を恋しがる世界樹に記憶ごとパクリンチョされてしまうので、人は増やせないらしい。過去に試行錯誤した結果、巫女は一人。それが日本とプルナスシア、両方の世界のバランスを保つためには丁度良いのだという。今の二人という状態は、特例中の特例なのだ。店長に

言われた。

その特例が認められた理由として、ミサオさんの週二回という勤務日数も関係している。この異世界コンビニが繋がっているのは、私の近所のあのコンビニだけだ。だから、隣県に住んでいるミサオさんは毎日来られるわけではない。毎回、高速を一時間飛ばしてコンビニに来ていたのだ。

それもきついだろうな、と思うのだが、ミサオさんは笑いながら言う。

『自分の子供に忘れられるのは、さすがにつらいから』

そう言う時のミサオさんは、ちゃんとしたお母さんだった。そして――

「店長総受けは譲れないわ！」

こう言う時のミサオさんは、ちゃんとした貴腐人だ。本当に、ここまでオープンに好きだと明言されると、逆に気持ちがいいものですね。

「ソウウケとか何、その単語。本当に、ケンタ、お前のかーちゃんの話す言葉が、日本語と思えない……」

「奇遇ですね。俺も日本語ではないと思います」

ケンタと店長が揃って遠くを眺めていると――

ちゃらつちゃら、ちゃらちゃららん。

タイミングよく、入店音が聞こえた。

「いらつしやいませ……あ」

「よお、ソラ」

チャットと手を上げて入店してきたのは、ジグさんだ。神殿護衛騎士という役職の偉い騎士だが、パッと見は筋骨隆々の傭兵だ。少なくとも、騎士なんて高尚な部類の人間には見えない。しかし、[／]雷鳴のジグ、という二つ名を持つ凄腕らしい。

そのジグさんに続くのは、小さいおじさん――ドンゴさんだ。以前見た時から二ヶ月も経っていないのに、随分と痩せている。

「お久しぶりです」

ドンゴさんが頭を下げると、ケンタが破顔した。

「ドンゴさん！ 久しぶり！」

自分を召喚した相手だというのに、ケンタはとても嬉しそうにドンゴさんに近寄る。ドンゴさんもやんわりとした笑みを浮かべた。そういえば、この二人が一緒にいるところを見たのは最初の数回しかない。複雑な関係のはずなのに、ケンタの態度はラフレ姫や王子に対するよりも親しげで、信頼している様子が見てとれた。

「ソラちゃん、事務室使うから、しばらく一人で店番していてね」

店長がそう言うって、ドンゴさんを事務室に招いた。次いで、ケンタやミサオさんも中に連れていく。ジグさんもついていくのかと思ったら、彼はおにぎりを選んでいた。どうやら話には加わらないようだ。

以前は人の少ない森の中にあったこのコンビニだが、神殿駅前店に移転してからは神官のお客さんが頻繁に訪れる。営業時間は朝七時から夜六時までと、二十四時間ではないものの、時間帯に

よって混雑するので一人で対応するのが厳しい。しかし、閉店間際の今の時間なら、それほど混雑することもない。

「ドンゴさん、わざわざジグさんが連れてこられたんですね」

大量のおにぎりが入ったカゴをレジに突き出してきたジグさんに話しかけると、ジグさんは「ああ」と気もそぞろに返事をくれた。その視線は、カゴの中にあるおにぎり——十二月限定発売の「生クリームメリークリスマスマスおにぎり」に釘付けだ。……ファンファレマートの商品開発部、本当に一体何が目的でこれを売ろうとしているのだろうか。

自分では買わないだろうと思われるおにぎりのバーコードを、私はバーコードリーダーで読みこんでいく。

すると突然

「申し訳ありませんでした！」

と大きな声が事務室から聞こえた。ドンゴさんの声だ。ドアがないせいかその声は良く響く。

チャリと事務室の方を横目で見ると、ドンゴさんのピンク色のローブの裾が床についているのが見えた。きつと土下座でもしているのだろう。

そんなことをするくらいなら、ケンタを召喚しなければよかつたろうに——とは思えない。

ドンゴさんが何を犠牲にしてケンタを召喚したのか——日本人を召喚するためには、プルナスシアの人間を生贄として捧げる必要があると聞いたのは、まだ記憶に新しい。生贄なんてそんな酷い代償を支払ってでも、ドンゴさんの国は……ドンゴさんは、勇者を召喚したかった。そこまで彼の

国は追い詰められていたのだ。

ドンゴさんが犠牲にしたのは、十三歳の自分の息子だったそうだ。

国のために、彼は自分の子供さえも差し出した。そこに非人道的だとか、非道徳だとか、私が自分の倫理を振りかざして割り込むことは偽善に思えて、憚られた。

唯一、それらを声高に非難できるとすれば、それは相手の都合で勝手に召喚されたケンタ自身だけだろう。

だけど、ケンタがドンゴさんに対してそんなことをする姿を、私は一度も見たことがなかった。ドンゴさんとの関係を、直接ケンタに聞いたことはないが、先ほどの様子からしても、互いに信頼しあっているのが分かる。きつと、二人の間に色々あったんだろうな、と思う。

「起こってしまったことは仕方ないですし、あなたが死んでも意味ないですから、せいぜい、うちのケンタのために長生きしてください」

うお……

思わず漏れそうになった声はすんでのところで堪えた。

そのつもりがなくても、事務室の中の声はそれなりに聞こえてくる。土下座したままのドンゴさんに対して、ミサオさんの凜とした返答は、ヒヤリと冷たい氷の刃のようだった。

「ケンタから、あなたが何を犠牲にしてきたのかは聞いています。ですが、それとこれとは別問題です。どうぞこれからはケンタのために自分を犠牲にしてください」

日頃、腐った発言が多いミサオさんが、今はドンゴさんに対して淡々と言葉を投げかけている。

そこに普段感じられる親しみの色は全くない。だけど、ミサオさんらしい優しさは感じ取れた。

だって、ドンゴさんを責める言葉が一切ないのだ。それよりも、「これから」を提示する言葉は、何て優しいんだろう。

「命尽きるまでケンタ殿のために尽くします！」

土下座したままであるうドンゴさんの声が、また店内まで響いてくる。その言葉を聞いて、ケンタのためにも長生きしてよね、ドンゴさん——と思う。

「ドンゴ八号神官は、ケンタ付きになり、中央神殿に戻るそうだ」

会計を終えたおにぎりをレジ袋に入れる私に、ジグさんが言った。さつきから気になっていたのであろう生クリームおにぎりを、レジ袋から取り出している。

「そうなんですか？」

日本人を召喚した罪で、辺境で一生奴隷みたいな生活を送るのかと思ったが、随分早い温情処置だ。

ジグさんは話の途中で、生クリームおにぎりを頬張る。いつも思うけれど、レジ前で食べるという自由行動は、慎んでほしいのだが。

「ケンタがそうしたいと主張したからな」

「ケンタが……」

神殿は勇者であるケンタを優遇するとは聞いていたが、一度執行された罰の軽減もアリなのか。日本人に対してかなり融通をきかせてくれるんだな。

「俺には、自分の自由を奪った人間を傍に置く坊主の心情は理解できん、ゲ——」

「げ？」

目の前でジグさんが固まった。生クリームおにぎりを半分食べた状態で。

どうした、雷鳴のジグ！ 私も同意しようとした矢先に何があった。

ジグさんはレジカウンターに食べかけのおにぎりを置くと、トイレに向かって猛ダッシュしていった。

不思議に思いつつ、ジグさんの食べかけを見た私は、「ヒッ」と声を上げてしまう。

そこにあつたのは、生クリームの中に埋まる「梅干し」だった。

わあ、白いクリームに赤い梅干しのコントラストが素敵☆——なんて思うわけあるか！

ファンフレマーケット、商品開発部、食べ合わせくらい考える——！！

閑話休題。

その後、ジグさんはなかなかトイレから戻ってこなかったのだが、そのあたりはそっとしておいてあげた。むしろ、こんな商品を出してすみません、と謝りたいくらいだ。

それからしばらくして、店長たちが事務室から出てくる。ドンゴさんは、かすかに目を赤くさせていた。

「それでは、これからは神殿の方でよろしくお願いします」

そう言っただんゴさんは深々と頭を下げた。その背後に立つのは、虫の息のジグさん。浅黒い顔が、今は土気色だ。ジグさん、冗談抜きで梅干しが苦手だったんだな、と少し可哀想になった。

「うん、俺もドンゴさんがいた方が落ち着くから助かるよ！」

澆刺とした笑顔のケンタを、その隣にいるミサオさんが苦笑いしながら見つめる。息子を奪われた形のミサオさんにとって、ドンゴさんは決して許せる相手ではないだろうに、それでもケンタの気持ち優先するミサオさんは、素敵なお母さんだなど思った。

「あと十年ドンゴさんが若ければ、ケンタ攻めでちようどよかったのに……」

訂正。本当、ミサオさん、生粋の「主腐」だな……

「じゃあ、ジグ。ドンゴさんを神殿まで送って行ってよ。って、何でそんなに顔色悪いんだ？」

店長が、ジグさんの土気色の顔を見て不思議そうに尋ねた。

「ちよっと、な……」

言っちゃってもいいんですよ、ジグさん。このコンビニのおにぎり、おかしいって！

ただジグさんは何も言わず、ヨタヨタとドンゴさんを連れて帰る。どんなに調子が悪くとも護衛騎士の職務を全うするジグさんの姿に、私は心をこめて来店店の謝辞を述べる。

「ありがとうございますー」

ちやらちやら、ちやらちやららん。

「どうしたの、これ？」

退店音と共に帰る二人を私が見届けていると、店長がジグさんの残していったおにぎりに気がついた。

「ジグさんが食べられないみたいなので、店長への差し入れに置いていくそうです」

「あ、この新発売、美味しいよね！」

店長が生クリームおにぎりを手にして言った。

「中の梅干しとのハーモニーが今までにない味だった！ ファンファレマートの商品開発部って凄くおっしゃるよ」

一瞬、冗談かと思ったのだが、本当にそう思っているらしい。きっと店長のような味覚の人が商品開発部にいるんだろうな……

そうこうしているうちに、気がつけば閉店時間を過ぎていた。

「じゃ、そろそろ時間なんで私上がりますね」

「あ、送ってくー！」

サラリと吐かれた公私混同の言葉に、不覚にも一瞬自分の頬に赤みが差した。ニヤツとケンタとミサオさんが笑いだすのがいたたまれない。

「は？ なんで店長が一店員を送ってくるんですか？ まだケンタとミサオさんが残っているじゃないですか」

二人を放置するつもりなのかと問えば、店長がはにかんで言う。
「ちよっとあつちのコンビニに用があるから、そのついで」

「私がついでか」

「あら、ヤキモチ？ うふふふ」

ミサオさんが心底楽しそうに笑うので、私は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「ヤキモチじゃないし！」

すると、ケンタがヒューと口笛を吹いた。やめろ、その中学校の教室みたいなノリ。私の顔も一層赤くなる。今までほんのりシリアス風味だったのに、一転して恋愛モードとか、本当に忙しいな！

「こ、公私混同はどうかと思います……！」

それを言うのが精一杯な私に、ケンタがニヤニヤしながら店長への援軍を出す。

「ソラさん家、近いんでしょ？ 俺もお母さんと話したいことがあるから、少しの時間なら店長、出かけても大丈夫だよー」

「うん、それじゃ閉店作業よろしくね」

そう言うのと、店長は私の帰宅準備が整うのを待って、コンビニの裏口から外に出た。

キンと冷える十二月の夜の空気。

異世界コンビニは裏口ドアが出入り口なので、そこから一步出れば、家近のコンビニの裏口だ。今ではすっかり慣れてしまったが、この仕組み、よくできているなとしみじみ思う。

「うわ、こっちも冷えるね」

店長の口から出る息も白い。外は本当に寒かった。

「そうですね。じゃ、お疲れ様です」

「送って行って言ったでしょ？」

苦笑いしながら繰り返された言葉に胸が騒ぐ。心臓がバクバクしているのを、私はマフラーに顔

半分を埋めることで誤魔化する。

「こっちから帰ろうか」

店長が私の背中にさりげなく手を回して促したのは、家に向かう遠回りの道だ。国道沿いを歩けばすぐに我が家なのに、わざわざ裏手から行くなんて、どういうつもりだ。

無駄な遠回りをすると、沈黙が長引いていたまれなくなる時間ができる。しかたなく、とりとめない会話として思いついたのは、先ほどのドンゴさんのことだった。

「ドンゴさん、ケンタ付きになれてよかったですね」

「ケンタは最初からドンゴ八号神官のことを信頼していたから。ケンタもこれで少しは楽になれるといいけど」

「どうしてケンタは、自分を召喚した人間を信頼できるんですかね？」

疑問を投げかければ、店長がちよっぴり困ったように笑った。

「ドンゴ八号神官はスクラント国の神官だったせいかな、あまり神殿寄りの性格じゃなかったから」
「どういう意味ですか？」

「神殿の間は、あまり本音を出さない」

ちよっと意外だ。私のよく知っている神官は、店長と、ラフレ姫というナナナスト国のお姫様の神官で——店長はちよっとアレだが、二人とも誠実な人だと思う。

「ほら、ソラちゃんのことをケンタに隠していたしね」

「ああ……」

でもそれは、止むに止まれぬ事情があったからだ。だけど、それがケンタには不誠実に見えたのかもしれない。

「ドンゴ八号神官はそのあたりが他の神官とは違っていてね。情報を漏らしはしなくても、ケンタに対して正直に接していたんだと思うよ」

なんだかそれも切ない話だな。一番信頼できる相手が、自分を召喚した相手だなんて。一番憎んでもいい相手だろうに、その相手が誰よりも自分のことを考えてくれているというのは、本当に複雑だろう。

色んなことに思いを馳せていたら、そっと手を繋がれた。油断も隙もないな。ムツとして横を見上げると嬉しそうな店長の顔が見えて、私は俯く。

なんだかなあ……！

その後は二人とも無言で歩いた。家の傍まで来ると、店長はようやく手を放した。時間にしたらずか数分の遠回り。だけど、じつとりと手に汗が滲んでいた。これくらいで緊張するとか、本当に私の恋愛偏差値低いな。

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい……」

コンビニへ戻る店長の背中を見つめながら、私は、「はあ……」と、重いため息を吐く。緊張だけではない。少しの失望も込めて。

なんだかなあ……！

どうなりたいのか。どうしたいのか。

そんなの私だって分からないが、一つだけ言えることがある。

藤森奏楽、二十三歳。クリスマス月間ですが、まだフリーです。手を繋ぐことはあっても、そこから先がありません。大事なことから、もう一度言います。

私、まだ恋人がいません。

何故なら、誰にも「付き合ってください」と言われてないからです。

コンビニの店長と、手を繋ぐだけの微妙な関係です。それって、どうなのさ！

2 異世界恋愛ってありますか？

「奏楽、就職どうするの？」

二十三歳にもなつて、今、私は親の前で小さくなっていた。叱られるのを待つ子供のようだ。実際はダイニングでテーブルを囲んで夕飯をとっているだけなのだが。

目前には真顔の父と母。そしてニヤつく姉。

姉は出産後の床仕上げを終え、すでに自分の家に帰ったはずなのに、何故か頻繁に我が家に来る。

今日も私の隣で夕飯を美味しそうに食べつつ、ソファで眠る姪っ子・翠ちゃんを放置中。初めての子なのに、堂々たる放置ぶりだ。まだ寝返りも満足にできないからいいが、いつかソファか

ら落ちるぞ。とはいえ、やること全て大雑把な姉がそれを気にするかは怪しいところだ。きつと、翠ちゃんも落ちて笑ってあやすだけだろう。強く生きろよ、翠ちゃん……！」

「ちよつと、奏楽。そうやって現実逃避してないの。で、一体どうするつもりなの？」

いつもは私をからかう母の口調が、今日に限って厳しいのは、大学を出たにもかかわらず、未だ私がフリーターであることが問題になっているからだ。

「一応、チーフにはなった……よ？」

「コンビニのチーフと言ったって、アルバイトなのだろう？ アルバイトのままでもいいのか？」

優しい声で紡がれる父の冷静な指摘が、凄く耳に痛い。

「えつと……、その……、チーフだと時給が千円超えて……」

「だが、福利厚生は充実していないだろう？ せめて健康保険や厚生年金がしっかりしているところに入ったらどうだ？ 大学を卒業して一年以上経っているが、契約社員なら入れる会社はあるだろう？」

そうなんだよね。

月二十万円の収入だとしても、片やコンビニのアルバイト。

片や月給は十六万円前後であっても、福利厚生が手厚い契約社員。

その選択肢ならば、給料は下がっても、福利厚生がしっかりしていた方がいいと親は言う。確かに会社によっては、契約社員でも厚生年金に入れるところもあるので、現在細々と国民年金を払っている私にとっては、そちらの方が格段にいいことは分かっていた。

「それは……分かってるん……ですけど、ね」

「アルバイトなら他にもいるんでしょ？」

いるにはいるが、ケンタはすでに異世界人扱い。ミサオさんだつてパートだし、隣県住まいなのでそれほど頻繁には通えない。きちんと一定の時間いられる「巫女」としての役目もしっかりできる日本人は、私だけなのだ。

「だけど、それを親にどう説明しろっていうのさ……！」

ぐうの音も出ない私を、さらに叩き潰したのは姉だった。

「小林さんに挨拶に来てもらえば一発ジャン」

いきなり、店長の名前が出てきた。ちなみに、店長はこの「小林」姓でちゃんと日本に戸籍があるらしい。どうやったの？ どうやって作ったの？ と思わず店長を揺さぶったが、店長はニコリと笑って「さあ？」と返してきたので、日本怖い、と思った。一般市民である私の知らないところで、この国は色んな世界と繋がっているんじゃないだろうか。知りたくもないが。

しかし、今は店長の戸籍の話をしている場合ではない。何故ここで店長の名前を出す、という問題に対応しなければならぬ。

「挨拶？」

訝しげに姉を見る私に、姉はニヤリと笑ってから言う。

「だって店長さんだし」

だから何で挨拶？ 店長が挨拶に来てどうすると思ったが、母が「まあ？ まあまあまあ！」と

甲高い声を上げたのでピンときた。

「何だ、就職しないのはそのつもりだったのか？」

父がわずかに眉間に皺を寄せたが、そのつもりって何のつもりだよ！

「違うっ！ 私と店長はそんな関係じゃないし……！」

必死になって両手をブンブンと振ったが、姉の追撃は容赦ない。

「先月、わざわざ家まで迎えに来たじゃない」

「それは——！」

忘れるはずもない、ケンタの母親に会いに行ったあの日のことだ。くそ。わざわざ我が家に迎えになんて来るから——！

「なんだ、そんな話は聞いてないぞ。そいつは誰なんだ」

父はとても不機嫌そうだ。いや、お父さん、相手なんていないですから。あなたの娘、まだユニコーンに触れるくらい汚れなき処女ですから！

「ホラ、お父さん。ソラがこの前まで勤めていたそのコンビニ。あそこの店長さんよ。今勤めているコンビニは、その店長さんに頼まれて異動したのよね？」

母が余計なことを言った。

我が家の近所のコンビニエンスストア。当然、父だって会社の行き帰りに立ち寄ることはある。店長が誰か思い至ったのか、父の眉間の皺がさらに深くなった。

「……随分年上じゃないか？」

「三十歳だよね？」

だから、火に油を注ぐなよ！ 横から口を挟む姉をギツと睨みつけたが、姉はどこ吹く風だ。

「あら、じゃあ、ちょうど適齢期なのね」

母がのんびりとした追い討ちをかけるので、より一層事態が収拾できなくなる。

「お、お父さん、あのね——」

父は深く息を吐くと、

「とりあえず、就職のこともあるのだし、その人が店長というなら尚更連れてきなさい」と、最後通牒を私に突きつけてきた。

実際してもいないのに実家に招待なんて、どう考えても店長逃亡フラグしか立たない気がするんですが。

泣きたい……

※ ※ ※

「——ということ、今度の金曜休み、我が家に来いや、店長」

「え、え、ええええええ？」

家族会議の晩、私は結局、店長に電話でそのことを告げた。

電話の向こうの酷く動揺した店長の声に、動揺したいのは私だと返したい。だが、それを言うて

は話が進まないで、極めて冷静に店長の次の言葉を待つ。

店長と電話しあうようになったのはいつからだろうか。

とりあえず、ケンタの両親を探さようになってからなのは確かだ。だけど、店長が異世界にいる時は繋つながらないので、それほど電話をかけてはいない——うん、週三回だし。別に付き合あってなくてもする頻度だよな？ そう思う、思えば、思いたい（願望）。

「ただ、社員にするって話をしてくれればいいので……」

チーフの肩書きが弱くなったら社員にしてくれると先に言ったのは店長の方だ。バイトから社員になる手続きがどんなものか分からないが、そのあたりは店長に丸投げするつもりだ。

第一、向こうの世界でかなり重要な役割を担っているのだから、福利厚生全般、手厚く保障してくれてもいいと思うんだ。

「ソラちゃんのお父さんって、怖い？」

「怖くはない。優しい」

「そりゃ、父親は娘に甘いよ。うわ、何着てこう」

今は日本の自分の部屋に在るであろう店長が、電話を持ちながらゴソゴソとクローゼットを漁ある音がする。

家近の店舗は、結局店長がまた店長をしていた。この間までは○号神官ゼンのレンさんが代理をしていたのだが、中央神殿での仕事が忙しくなってしまったのだ。その時丁度、私が巫女を続行することが決まったから、同じく日本に居住継続になった店長がまた務めることになった。

「ソラちゃんが巫女の間は、俺もこっちに住まいを確保しないと駄目だから」

とは店長の言げん。コンビニという“場”を提供し続ける限り、店長は日本にも定期的に滞在しなければならぬそうだ。そんな様々な制約を、色々約束事があつて面倒だと聞き逃にがしてはいるところがかしい。

今は自分の役割がどんなものか分かってはいるし、少しでもブルナスシアについて知りたいと思っている。それは、店長自身のことをもっと知りたいという、複雑な恋愛感情が起因だったりするのだが、この単純店長はそこまで気が付きやしない。

電話の向こうの店長は、自分の服選びで頭が一杯だ。

「うわ、スーツ、クリーニング出しとかないと！」

「スーツなんかじゃなくていいよ。普通の服で来てください、店長」

「え？ だつて初めてお父さんと会うんだもん。印象は良くしたいよお！」

お前は初めて彼氏の両親に会う女の子か。

「なんか疲れたから、電話切っていい？」

「駄目。もっとソラちゃんの声聞きたい」

がう。

甘い声で囁ささかれて、あやうく私はスマートフォンを投げそうになるのを堪たえた。この前、ようやく機種変更したばかりだというのに、うっかり壊こしたらどうしてくれよう。

このバカ、馬鹿、カバ。ピンクカバ！

いつも通りでいてくれればいいのに、最近の店長はたまに変なことを言うから凄く困る。

「ソラちゃん、好きだよ」

ちゅ、とリップ音まで聞こえて、私の耳はもう真っ赤だ。そんなこと、三十の男が平気でやらな
いでほしい。

「ね、ね、寝るっ！」

「おやすみ、ソラちゃん」

クスクスと電話の向こうで笑っているのがムカつく。本気でムカつく。

グヌヌと唸^{うな}って「おやすみ」と返して電話を切ると、私は布団を頭からひっかぶる。

まだ、耳の奥に店長の声が残っているみたいで、布団に潜^{もぐ}ったまま、ぶるぶると頭を振った。

「私も、……すき」

すでに電話は切れているから、こんなこと言っても意味はない。それでも、誰にも聞こえないく
らい小さな声でそう呟くと、胸が締め付けられそうになる。

情けない。どうしてあんな人を好きになってしまったんだろうと思うけれど、落ちてしまったの
だから仕方がない。

「てんちよお……すき……」

布団の中で呟く。凄^{しみ}い、凄^{しみ}い、好き。

両想いの私たち。これで付き合っていないなんて、嘘くさいと思われるかもしれないが、実際、

そうなのだ。店長は、「好きだ」とは言うてくるが、「付き合っ^つて」とは言うてはこないし、私の言

葉を求めたりもしない。

薄々、互いに分かっているのかな、と思う。

私たちの間には高くて大きな壁がある。“世界の違い”というその壁を前にして、私は何もでき
ずにただ見上げるだけ。

だって、好きって言って付き合ったら、キスもするし、それ以上のことだっていつかするかもし
れない。だけど、そういう体だけの繋^{つな}がりじゃなく、やがてもっと深い繋がりを欲しくなった時、
それから、どうなるの？ どこで生きていくの？

私たち——、住んでいる世界が違うのに。

※ ※ ※

電話した翌日。私は店長が我が家に来ることを、早々にケンタに白状させられた。何故なら異世
界コンビニに来た店長が、スキップしながら神殿へと向かったからだ。

「だから店長、あんなに頭に花が咲いていたんだ」

グシシと意地悪く笑うケンタは、モップで床を拭きつつこちらを見ている。本日は珍しく客足が
少ないのでケンタの口も軽い。

とはいえ従業員同士の私語はあまり褒められたものではないぞ、ケンタ。

「あーあ、ソラさんいよいよ結婚かあ」

「は？ 付き合ってもないのに何で結婚よ」

「え？」

「何よ？」

ケンタは目を丸くして私を凝視する。言いたいことは分かる。だけど、本当なんだから仕方がない。

「付き合って——なんて言われてないし」

「え、じゃあセフレ？」

「ヤツでもないわ、ボケ！」

そのモップでお前の頭も磨いてやろうかと睨みつける私を、ケンタは「うわー」とドン引きの顔で見ている。

「だって、結構デートしてるよね？」

「一緒に出かけたくらいでデートって言うな」

「でも、そのたびにキスはしてるんでしょ？」

お前は本当に十五歳か。

「付き合っていないのにキスなんかしませんよ。ソラさんは身持ちが固いんです」

「ええー！ 店長、すっげーヘタレ！ ありえねえ——！」

ケンタがそう叫んだ瞬間——

ちゃらつちゃら、ちゃらちゃららん。

いつもの入店音が耳に届いた。

「ホラ、仕事！」

まだ何か言いたげなケンタを促して、それから「いらっしやいませー」と入り口を見遣れば、そこには見慣れた顔があった。

「あ、ラフレ姫！」

犬のように嬉しそうに駆け寄ったのはケンタだ。それでもモップで床を拭きながら、と真面目に仕事をしているのは、ちよつとだけ可愛いと思う。

「ソラさん、ケンタ、こんにちは」

今日も薄いピンク色のローブがとてもお似合いだ、ラフレ姫。淡い水色の髪も薄紫の瞳も、本当に可愛い。一度でいいからお姫様な格好のラフレ姫も見てみたいな、と思う。

そんなラフレ姫に纏わりつくケンタは、犬なら尻尾を振っていることだろう。

こちらの世界にケンタが来て、すでに三ヶ月が過ぎている。そのたった三ヶ月で、私より少しだけ高かったケンタの身長は、いつの間にか私やラフレ姫を越えてしまった。これが成長期の男の子ってやつかと思うと、甘酸っぱい気持ちになる。今のケンタのラフレ姫に対する態度を見れば尚更だ。

恋ではないけれど、気になる年上のお姉さんに対するケンタの態度は好ましい。ベタベタしすぎもせず、かと言って、からかったりする子供っぽさもない。この年頃の子には珍しい純粹な態度に、ケンタの育ちの良さが滲み出ている。



「今日、バイト終わったら遊びに行かない？」

ケンタ、まだバイト中だぞ、と言いたいところだが、最近ラフレ姫と会えていないとぼやいていたので、少しだけ大目に見てあげる。

だってあんなに嬉しそうなケンタを見ると、つい、甘やかしてしまいたくなるのだ。

一人っ子特有の人懐っこさは、ケンタの長所の一つだろう。

「そうですね、いいですよ」

対するラフレ姫は、慈愛の目でケンタを見ている。その目を見れば、間違いなくケンタが弟認定されていることが分かる。ご愁傷様だ。

「やった！ デートだよ、デート！」

「はいはい、デートですね」

油断するな、ラフレ姫。ケンタも一応、男だぞ。

そんな私の内面を代弁するかのよう（必要ないけど）、ちゃらっ……と入店音が最後まで聞こえないほどの勢いで駆けつけるバカ一人。

そう、ギザク国第五王子ハクサ殿下だ。黙っていれば金髪碧眼の格好いい王子様なのに、残念要素が多すぎる。

「ならぬ！ ならぬぞ！ ラフレ姫とデートなぞ、余は許さぬ！」

「誰だお前」

王子は何故か、白いフルマスク姿で登場した。目と鼻穴と口のところだけくり抜いてある覆面マ

スクだ。どう見ても強盗です。それでも王子だと分かったのは、後ろにお供であるジーストさんとナシカさんがいたからだ。

体格のいい騎士がジーストさんと、近衛魔法士という魔法使いがナシカさん。ナシカさんは筋肉ムキムキ男だらけのプルナスシアでは希少な、ほっそり草食系男子だ。私のストライクゾーンど真ん中。ナシカさんが来店した時だけは、私はから揚げを増量して売ってもいいとさえ思っている。いや、いつそのこと貢いでしまおうか——と内心思う。

「ソラさん、今日は店長不在で、ツッコミ要員いないからね」

「内心思う」としつつも、実はオーブンに言っている私の心の声に対し、ケンタがさり気なく返してきた。しかし、全くもってパンチがきいていない。まさかツッコミ要員として、店長を恋しく思う日が来ようとは……まあ、そんなこと本人には絶対言わないけどね。ツッコミ要員として必要だと言っても喜びそうだ。

「それは置いて——王子、なにその顔」

「コンビニ強盗にしか見えないんだけど……」

ケンタもさすがに怪訝な顔をしている。王子はグヌヌと唸ってから叫ぶ。

「こ、これは、今、キザク国で流行っている仮面だ！」

「無理あるだろ、それ。どう見ても流行っているとは思えないんですが。それに、流行っているならジーストさんとナシカさんも被っていないとおかしいと思う」

私がそう突っ込めば、ナシカさんがにっこりしながら頷いてくれる。

「流行っていません」

相変わらず、スラリ体型を包んだ紫の衣装がとてもお似合いです。

隣にいる騎士姿のジーストさんだつて、無駄に筋肉だけどキリリとして格好いいのに、その全てを真ん中の王子が台無しにしている。

そう言えば、ネットで男の人の間に宇宙人を挟んだ写真を見たことがある。顔も白いし、こんな感じかも。王子は体が大きいから、リトルグレイならぬビッググレイか。

そんな宇宙人を警戒するかのようには、天井からシュルシュルと降りてくる存在。人間ではない。防犯カメラ触手のボウちゃんだ。別名・伝説の触手ギリギンテ。店長が防犯のために作った警備担当の触手だ。何故に触手。どうして触手。

だが、この触手こそ、このコンビニで一番使える人材(?)だ。ボウちゃんは、何本もの触手を王子の上でスタンバイし始める。王子は背後に蠢くボウちゃんにはまだ気づいていないようだ。

「王子、その覆面、取れない理由でもあるの?」

「……」

王子がサツと目を逸らした。何だ、その、後ろめたいことがある子供みたいな態度。そんな態度を取られたら、その覆面の中身、気になるじゃないか。

そっちがそういう態度なら、こっちにも考えがある。

「ジーストさん、いいですか?」

とりあえず一国の王子なので、側近であり監督責任もあるだろうジーストさんに尋ねると、彼は

無言で頷いた。

いいようです。

と、いうことで――

「ボウちゃん、やっておしまいなさい!」

私の声と共に、『ガッテンダー!』と機械音のような声が――そうです、ボウちゃんは片言ながら話せるようになりました。

しかも、ある日突然、

『ソラサマ、スキ』

と話しかけられた時は、啞然とするも、その可愛さに危うく触手と恋に落ちそうになった。

「そんな機能、つけてないのに……。まさか進化!?」と店長が怯えていたけれど、そんなの今更でしょう。元は世界樹の葉やら根っこやらをベースに作られた人造植物なんだから。

大切なのは、防犯カメラ触手のボウちゃんが、毎日元気でいられることだと思うの。

『シャ――!』

「うおっ! よせっ!」

必死にボウちゃんの触手を避けようと王子は奮闘したが、ボウちゃんに敵うわけがない。ガシリと拘束された後、ズルリと白い覆面を外された。

「……」

「……」

「……」

順に、私、ケンタ、ラフレ姫の沈黙です。

もう、黙るしかないよね。

王子の顔には、無数の青い縞模様ができていた。顔全体にペイントされたのかと思っただが、塗ったわけではないようだ。スイカみたいで気色悪い。

顔はいいのに、毎回どうしてこんなにネタの宝庫なんだ、王子。

「うわ、キモイ」

後ずさりしたケンタと同じく、私も後ずさりしたくなる。

「ちよっと、伝染病? 病気持ちなら家で休んでなよ!」

「ち、違う! これは、空気感染でうつる病気ではないっ!」

叫ぶ王子。

次の瞬間、絶対零度の冷気を纏った声が、コンビニ内の温度を一気に下げた。

「カンタレ国で有名な風土病ですわ。普通に生活するぶんにはうつりませんのよ?」

にっこりと微笑んだのはラフレ姫だ。でも、目が笑ってないし。

「ま、まさか……」

風土病って、前に聞いたことがあるけれど、それは王子の国――キザク国の風土病の話だ。

「先週、ハクサ殿下は外交でカンタレ国に行かれていたと聞きました。なかなか楽しい外交だったようですね」

「いや！ 違う！ 違うんだ、ラフレ姫！」

浮気男の必死の弁明に近いものがあるが、実際そんな感じだ。ラフレ姫は最後通牒を王子に突きつける。

「○○病という病気ですよ。×××病と同じく、感染すると半年は顔にこのような模様が出てしまうんですの。感染原因は主に性的接触と言われていますわ」

また性病か。

「ち、違うんだ！ ラフレ姫っ！ カンタレでもてなしとか言って勝手に女を寄越してきて！」

えー、性病持ちの女寄越してくるなんて、外交問題どころの話じゃない気がするけど……

「カンタレでは、この病気は子供の頃……出産時に皆感染するもので、免疫がついています。ただ、他国の者と通じた場合、たまたま抵抗力の弱い人間はかかることもあるようですが、それも稀だと言われています。以前外交に行かれた第四王子はそんなことはなかったもので、まさかハクサ殿下が罹患するとは思わなかったようです。この事態に、カンタレ国は我が国に大変申し訳ないことをしたと謝罪してきています」

と、説明してくれたのはナシカさん。店長のピンクローブはフローラルに近い匂いだけど、ナシカさんのローブはどんな匂いなんですかねえ……？

「嗅いでみますか？」

「い、い、いいですっ！」

にっこり微笑まれたら私、どうにかなってしまいそうです……！ って、心の声が届いてた！

「貴様ら、余を無視するな！」

王子が喚いでいるけれど、無視というか放置というか、そもそも何を言えればいいんだ、おい。

「だって王子が感染した理由って……エッチしちゃったからなんですよ？ 好きな子がいる男として、それはどうなのかなあと思うんだけど」

「そうだよねえ。俺も不誠実だと思ふなあ」

ケンタがラフレ姫の横で王子を睨んでいる。意外に潔癖なんだよな、この子も。ラフレ姫はラフレ姫で氷の微笑を湛えたままだ。怖い。まじで怖い。

「あら？ ハクサ殿下はどなたか好きな女性でもいらっしやるんですか？」

はい。爆弾投下。にっこり笑って大型来たよ。

ケンタが、ラフレ姫を見ながらわずかに顔を引きつらせた。中学生の君にまだこの修羅場はきつかるう。

ラフレ姫はとても綺麗な微笑を浮かべているが、全く目が笑っていない。

「ラ、ラフレ姫……！」

思わず伸ばした王子の手を避けるように、ラフレ姫はスッと体を後ろに引くと、小首を傾げてから、第二弾投下。

「それとも世の女性、全てがお好きなのかしら？ 博愛主義でいらっしやるのね。私は一人の殿方しか愛せないし、お相手もそういう方を選ぶつもりですので、ハクサ殿下の広いお心を理解できなくて残念です。ええ、きつと一生理解できませんね」

ハイ、死んだ——!

これは痛い。聞いている方も、あからさまに分かる。王子の顔は、青線以外の場所も青くなっていた。

「ではケンタ、バイト終わりにまた来ますね」

ラフレ姫は完璧なまでに王子を無視すると、ケンタに声を掛けた。

「え？ あ？ う、うん！ まっ、まってる！」

ケンタ、惜しい。ここで余裕の笑みを見せられれば、なかなかだったのに。だが、そこまでのスキルを中学生に要求するのも酷だろう。

ちゃらつちゃら、ちゃらちゃららら。

ラフレ姫は、石化というか氷みたいになまって動かなくなった王子をわざと避けるように通り過ぎる。そして、ジーストさんとナシカさんに軽く頭を下げてから外に出ていった。他国の家臣にも頭を下げられるんだもの、本当にラフレ姫って一般人というか一神官としての身分をきちんとわきまえている人なんだな。王子を見る限り、この世界には選民意識の強い王族もたくさんいるのだから、ラフレ姫には全くそれがない。私は付き合いやすいのでありがたい。

そして、どうしてそんな素敵な女性に惚れている王子は、ここまで自分を律せないのだろうか。

「王子。私の世界でもさ、どんなに性格良くても女にだらしのない男には、それなりの女しか寄ってこないよ？」

氷になった王子に話しかけると、王子がぐじぐじと弁明し始める。

「よ、余だつて、好きでこんなことをしているわけでは……」

「え？ でも、接待だったなら自分が拒否すれば何とかなかったんじゃないの？」

ケンタが不思議そうに王子に問いかけた。ケンタ、ワザとか？ と思うほどのタイミンゲだ。

王子は案の定、ケンタの追い討ちにガクリと頷垂れた。

「ラフレ姫に……雰囲気似ていたんだ」

ポツリと零れた^{こぼ}吐きは、誰に聞かせるためのものだったのか。いや、聞いてはいるけど、聞いたくないし、知りたくなかったよ、そんなこと。

「ハクサ殿下のラフレ姫好きは、各国に知れ渡っていますからねえ」

ジーストさんがフォローするようにぼやくが、そういう理由でセレクトされた女の人は可哀想だ。それにうっかり乗っちゃう王子は、怒りを通り越していつそ^{かわ}哀れだけど。

しーんと、気まずい空気がコンビニ内に漂^{たよ}う。

やだ、この空気、なんとかしてほしい。私が悪いわけじゃないのに、いたたまれない。

その時、一陣の風と共に奇跡が舞い降りた。

「ハクサ殿下、愛、し、て、ます」

ラフレ姫の声が、王子の頭上から聞こえてきたのだ。

「ラフレ姫!？」

クワツと目を見開いて、声ができる方を見上げた王子。

『ラフレヒメノコエ、ヘンシュウシタ。ダマサレル。オマエ、チヨロスギ』

白いマスクを触手の先端に被せ、わざわざその口をバクバクと動かして語るはボウちゃん。
「スゲエ——声まで録音できるようになってるのかよ」

隣でケンタが感嘆の声を上げたが、問題はそこじゃない。

王子はわなわなと体を震えさせ、剣に手をかけると叫ぶ。

「おのれ、伝説の触手といえども火には弱いだろう！ 覚悟しろ、ギリギンテ！」

そして王子は、ボウちゃんを追いかけ始めた。左手から火がボワツと出るとか、奇術の世界だ。

ていうか、ここ店内。お前は放火魔か、王子。

「あれ？ 店内って魔法使えないはず……」

「王子のアレは、最近市井で流行り始めた発火棒です。左手に持っているでしょう？」

よく見てみれば、確かに王子の左手には棒がある。

「なんであんなのこの店に持ち込んでるんだ、王子。出禁にするぞ、コノヤロウ」

殺気立った私に、ジーストさんが慌てて訂正する。

「本日、王子はラフレ姫を花火に誘うつもりだったんです。アレはのために用意したもので。カントレ国の土産が、昼間でも綺麗に見える花火だったんです」

「なんていうか……本当に残念すぎますね、王子」

残念すぎて、よりいっそ哀れになってきた。

店内ではまだ王子とボウちゃんの攻防が続く。ボウちゃん、燃やされないだろうか。

大丈夫かな、とハラハラした瞬間だった。

『コノ、コワッパ。ワレニカテルトオモウカ！』

白いマスクの口が、大きくカーツ！ と開いて、中から触手がチラ見えるとか怖いんですけど。

しかも開いた瞬間、プシャーッ！ って、

何か出てきた——！ 白い液体っぽいやつが……！

王子の火はその液体で、あつという間に消えてしまう。

謎の白い液体って何、ソレ。何、そのオプシヨ……！

「うわぁ……何か、店長の性癖を疑うね……」

健全中学生男子でさえドン引く性癖って、ちょっと店長、どうかと思う。

今日もファンファレマート、プルナスシア中央神殿駅前店は平和だ……と、思いたい。

3 コンビニに永久就職？

金曜日。バイト休みだったこの日の晩、店長はガチガチのスーツ姿で日本のコンビニに現れた。

「うっわ、緊張するー」

スーツ姿の店長なんて初めて見た。神官服のピンクローブでも、コンビニ制服のピンクエプロンでもない店長は、いつもより凛々しく見える。肩にかかるほどの髪を後ろで束ね、背筋を伸ばして立つ姿はまさに美丈夫のようだ。おかしい、私の視力、悪くないはずなんだけどな。